

ゴリアトに不公平？ — よく知られた聖書物語の再読 —¹

ジョナサン・マゴネット
日原広志(訳)

若きダビデとベリシテの代表戦士たる巨人ゴリアトの生死を分けた遭遇についての物語は、ヘブライ語聖書における最も有名で人気あるものの一つです。若きダビデが巨大な敵に立ち向かい、単純な子どもの石投げ〔投石紐〕で打ち倒す様子は肯定的に子どもたちに教えられています。それは弱者がなんとかして強者を打ち負かそうとする無数の諸状況の中で引き合いに出されます — すなわち個人が巨大企業と戦う時、英雄的な防衛者たちが侵略軍を撃退する時、犯罪被害者たちが強力な搾取者に対抗して正義を勝ち取る際など。それは宗教的諸伝承の中で人気であり、ダビデの神への信頼と信仰が称賛され、成功の保証として推奨されます。〔宗教的伝承〕²にもかかわらず、それが持つ普遍主義と人気の故に、そのイメージはまた象徴的ゴリアトが自らの小さな敵に不可避免的にコテンパンにされるパロディや風刺画にうってつけです。しかしサムエル記上17章の物語のヘブライ語を細かく見れば、いかにしてダビデの成功が生じたかについては、多くの要素が考慮に入れられる必要があることを示唆します。

聖書の記録するところによれば、イスラエルの諸部族は、直接的征服あるいは漸進的入植によって、カナンの地に定住します。その地域を占めていた

1 訳注：これは2022年6月10日、Zoomオンライン会議方式で行われた西南学院大学神学部ロングチャペルにおける公開講演である。原題は、“Unfair to Goliath? Re-reading a Familiar Bible Story”。

2 訳注：以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

様々な国家の中で、彼らの最大の敵は、紀元前1200年頃から南部海岸平野部に定着していた民、ペリシテ人でした。イスラエル人たちをして自らの社会を部族的に結合された家族の緩やかな連合体から、彼らが「他のすべての国々のように、我々を裁く王を立ててください」(サムエル記上8:5)³と述べたように、一人の王によって導かれる一元的に組織化された国家へと変化せしめたものは、ペリシテ人からの脅威でした。王の主要な役割の一つは領土の防衛でした。最初に油注がれた王はサウルで、[キャリアの]初期に軍事的成功を収めました。聖書の記録によれば、ダビデは戦功著しい兵士で、そして当初はサウルの軍団の一員でした。しかしながら、やがてサウルの嫉妬とダビデの野心は彼らを分かち結果となります。ダビデとゴリアトの物語は、ダビデとサウルはどのように最初に出会ったのかについての二つのヴァージョンの一つとして導入されます。それはサムエル記上17章において詳しく物語られます。

それは長い章で、同一の出来事に対する異なる視点の間を頻繁に切り替わります。これは一つの物語としてたどることを分かりにくくさせます。私たちは映画やテレビで視覚的に物語を体験することに慣れているので、各節をあたかも映画におけるカットのように提示する手法へと移してみることは有益であるかも知れません。そこで「ストーリーボード」を作ってみました。26に分けられた場面が、用いられ得る様々な撮影技法—ロングショット、全景、群衆シーン、前景対話、クローズアップ、さしずめゴリアトのくずおれる様と死にはスローモーションと静止画さえも—を指示しつつレイアウトされています。

私の描画の出来についてはお詫びするものの、これらの添付したイラストが、いかにしてその物語は視覚化され得るかを示せば幸いです。[以下、図を示しつつ説明。]

3 訳注：以下、日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 聖書協会共同訳』からのものである。

ストーリーボード

- 場面1 1-3節 谷を挟んで向かい合うそれぞれの丘の中腹に陣取った両軍の
パノラマショット。おそらく太陽は一方の武具に反射して、ペリシテ人
の優越した武器類を際立たせている。
- 場面2 4-10節 ゴリアトのクローズアップ。彼の武具を担う者と共にペリ
シテの陣営から進み出、谷にて仁王立ちし、イスラエル人たちに一騎討
ちを持ちかけている。
- 場面3 11節 場面はサウル王へと切り替わる。千人隊の長たちと共に軍の
先頭にいるが、どうにも返答しようがない様子。
- 場面4 12-15節 語り手がダビデをエッサイの末の子として紹介する。彼が
羊の群れの番をする一方、兄たちのための食糧を持って前線を訪問して
いることを示す場面と共に。
- 場面5 16節 イスラエル人たちを嘲笑するために来る日も来る日も出てく
るゴリアトのショットの繰り返し。
- 場面6 17-18節 エッサイがダビデに兄たちへ食糧を持って行き、彼らの安
否を尋ね、そしておそらくは彼らを保護してもらえるように、司令官へ
の贈り物を持っていくようにと命じる様子をクローズアップ。
- 場面7 19節 カメラはダビデの兄たちのクローズアップ。次いで丘の中腹
のサウル軍の貧弱な装備を露わにするクレーンショットへとカメラを引く。
- 場面8 20節 誰かに羊の群れを託すダビデをトラッキングショットが追う。
次に宿营地へと旅するダビデのカット、さらに兵士たちが鬨の声をあげ
ている最前線へと降りていくダビデのカットも同様に。
- 場面9 21節 場面1の繰り返し — 谷を挟んで向かい合うそれぞれの丘の中
腹に陣取った両軍。
- 場面10 22-23節 ダビデが〔番人に〕荷を預け、兄たちに会いに行く様子を
ハンディカメラが追う。彼らが話していると、ロングショットでゴリア
トがやって来て日々お決まりの挑戦を繰り返すのを示す。ダビデへのク
ローズアップが彼の反応を示す。

場面11 24節 ロングショット。最前線にいるイスラエルの兵士たちがゴリアトを見て恐れて退く。

場面12 25-27節 カメラは互いに話し合っているイスラエル兵の一团の中を、熱心に聞いているダビデと共に進む。彼らは「ゴリアトを打ち負かす者がいれば、王はその者に多くの富と自分の娘を与えてくれるそうだと話している。ダビデは怒りも露わにして話す。「生ける神の戦列を嘲笑うあの無割礼のペリシテ人は、一体何者ですか。」

場面13 28-29節 クローズアップ — 怒れる長兄エリアブが、戦いを見物するだけの目的で羊の群れを置き去りにしているとダビデを非難する。不当に非難されたことに明らかに動揺して、子ども返りしたかのような口調で兄に言い返すダビデにクローズアップ。「私が今、何をしたというのですか。話をしているだけではありませんか。」

場面14 30-31節 群衆シーン。ダビデはゴリアトの振る舞いに対する怒りを繰り返しつつ、他の人たちの方に向き直る。彼らの返答。そしてダビデの発言は人づてにサウルの許に達する。

場面15 32-37節 サウルの天幕。そこにいるのはダビデ、サウルとサウルの将軍アブネル。ダビデはゴリアトと戦うことを申し出る。サウル「お前はあまりにも若いし、彼は戦士なのだ。」ダビデは自分がいかにして羊をライオンや熊から守ってきたかを語る。間があり、サウルはまだ納得がいかない様子。ダビデは付け加える。「ライオンの手、熊の手から私を救い出してくださいました。あのペリシテ人の手からも、私を救い出してくださいます。」この宗教的主張がサウルを説得。「行くがよい。主がお前と共におられるように。」

場面16 38-39節 コミックタッチの幕間。サウルはダビデに自らの兜と鎧と剣を与えるものの、ダビデはそれらに拘束されてしまい、殆ど動くことができない。そしてそれらを脱ぎ捨てる。

場面17 40節 谷の中にて。カメラはダビデが自分の杖を手に取り、そして川岸で滑らかな石を五つ選び、自分の羊飼いの袋にそれらを隠し、石投げを手にして、そのペリシテ人に近寄る様子を極めて詳細に追う。

場面18 41-44節 ゴリアトがダビデへと向かって移動する様子を両者の大きさのコントラストを示しつつロングショット。そのあと、カメラはゴリアトの肩越しに、ゴリアトがダビデの容姿端麗で血色の良いことを見、「杖」だけを持って戦いに来たことを軽蔑し、「お前の肉を空の鳥、野の獣にくれてやろう」と呪う一部始終を捉える。

場面19 45-47節 ダビデの視点で、彼がゴリアトに挑むように叫ぶ様子を。「お前は剣や槍や投げ槍で私に向かって来るが、私はお前が挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によって、お前に立ち向かう。今日、主はお前を私の手に渡される。私はお前を討ち、その首をはね、今日、ペリシテ軍の屍を空の鳥と地の獣に与える。全地はイスラエルに神がおられることを知るだろう。主が救いを賜るのに剣や槍を必要とはされないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主の戦いである。主はお前たちを我々の手に渡される。」

場面20 48節 ロングショット、ゴリアトがゆっくりとダビデの方へと歩を進める。(BGM は彼の足が大地を踏み締める様を強調する)。ダビデは彼に向かって走る。

場面21 49-51節 a ダビデは袋に手を入れて小石を選び出すと、石投げを使って石をそのペリシテ人目がけて飛ばし、その額を撃つ。石は食い込み、そして(スローモーション)巨体はうつ伏せに倒れる。(語り手「こうしてダビデは石投げと一個の石でそのペリシテ人に勝ち、彼を撃ち殺した。ダビデの手には一振りの剣もなかった。」ダビデはそのペリシテ人の傍らに走って行って、彼の剣を奪い、とどめを刺し、その剣で首を切り落とす。)

場面22 51節 b ミドルショット。絶望して見ているペリシテ軍。それからパニックと逃走。

場面23 52-53節 トラッキングショットが追撃するイスラエルと共にペリシテ人を追う。そして彼らの遠隔の町ガトとエクロンに向かって逃走するペリシテ人を見下ろすためにカメラを引く。それからイスラエルの人々がペリシテの陣営を略奪するのを見せるためにカメラを引く。

場面24 54節 フラッシュフォワード〔未来のシーンへ飛ぶ〕。ゴリアトの首をエルサレムへ、また彼の武具を自らの天幕へ持っていくダビデ。

場面25 55-56節 クローズアップ。サウルとアブネルの会話。サウル「あの若者は誰か。」アブネル「私は存じません。」サウル「あの少年が誰の息子なのか調べてくれ。」

場面26 57-58節 アブネルはゴリアトの首を持ったダビデをサウルの許へと連れて来る。サウルは「お前は誰の息子か」と尋ね、ダビデは「あなたの僕、ベツレヘム人のエッサイの息子です」と答える。黒へとフェードアウトし、「カット！」

物 語

さて、それではその章の細部のいくつかを検証しましょう。ゴリアトが現れる時、彼は「イーシュ ハツ・ヴェーナウム」〔אִישׁ הַבָּנִים〕、文字通りには「[二つの軍]の間の空間にいる男」、つまり自軍を代表して、相手側からの同様の戦士との一騎討ちを請け負うために選ばれた代表者たる「チャンピオン」あるいは挑戦者として描写されます。ゴリアトの言葉は単なる自慢や挑発ではなく、ある具体的な軍事的決闘へ招くものです。

「どうしてお前たちは戦列を整えて出て来るのか。私はペリシテ人、お前たちはサウルの家来ではないか。お前たちの中から誰か一人を選んで、私の方へ下りて来させよ。もしその者が私と戦って、打ち負かすことができたなら、我々は**お前たちの** 奴隷となろう。しかし、もし私がその者を打ち負かしたなら、お前たちは**我々の** 奴隷となって、**我々に**仕えるのだ。」(サムエル記上17:8-9)

二つの敵対勢力の間のそれぞれの代表戦士の勝利ないし敗北によって決定される競技を伴うこの慣行は、当時の近東地域においてはよく知られていました。それはまた両軍の全面戦争〔による被害〕を置き換える利点もありま

した。これは明らかに、百戦錬磨の代表戦士ゴリアトを擁するペリシテ人に馴染みの戦争のやり方でしたが、「サウルとすべてのイスラエル人は、このペリシテ人の言葉を聞いておののき、恐れた」（サムエル記上17：11）と本文が指摘しているように、その段階のイスラエル人たちはそのような戦闘の準備をしていなかったようです。

ゴリアトの武具についての詳細な描写は、彼の軍事訓練と、彼が代表として出てくる〔国の〕恐るべき力を強調しています。当時ペリシテ人は十分に組織された戦闘部隊でした。彼らは戦車を使い、その歩兵は高水準の兵器を装備していました。その上さらに、聖書が数章前に記録するように、（ペリシテ人は）彼らの軍事的優位を保持するために地域の締め付けを強化していました。

その頃イスラエルの地には、どこにも鍛冶屋がなかった。ヘブライ人に剣や槍を作らせてはいけないと、ペリシテ人が考えたからである。それでイスラエルのすべての人々は、鋤の刃や鍬、斧や鎌を研いでもらうために、ペリシテ人のところへ下って行かなければならなかった。……戦いの日になっても、サウルとヨナタンと一緒にいた兵の誰の手にも剣や槍はなく、持っていたのはサウルとその息子ヨナタンだけであった。（サムエル記上13：19-22）

私たちが先にイメージしたシネマヴァージョンであれば、カメラはゆっくりとゴリアトの体を頭部の青銅の兜から、青銅の鎧を経て、下腿部を保護している青銅の脛あてに至るまでパンダウン〔上下に移動〕したことでしょう。聖書はさらに彼の鎧の巨大なる重量を青銅5千シェケル—約100ポンド—とさえ記します。一個の恐るべき戦闘マシーンです！

ゴリアトを紹介し終わったので、私たちの物語は今やダビデの紹介に移ります。彼の家庭環境が詳細に明らかにされます。彼の父はユダの地ベツレヘムの人エッサイで8人の息子がいました。上の3人は名前が記されており、彼らはサウルの軍に参加している一方で、末の子ダビデは父の羊の群れの番

をしていることが分かります。この詳細な紹介は、私たちがダビデについて何らの予備知識を持っていないことを示唆しているように見えます。しかし実際は、その同じ情報の多くは直前の章の二つの物語において既に与えられています。このことは私たちが後で検証する諸々の出来事の実際の順序をめぐる問題を提起します。

ダビデは父によって兄たちに食糧を持っていくために遣わされていました。初めて彼が登場するのはゴリアトが挑発をしている時です。ダビデは直ちに反応しなかったように見えます。なぜなら私たちが最初に知らされるのは〔彼の反応ではなく〕イスラエル兵たちの間に流布していたある約束についてだからです。

「出て来たあの男を見たか。彼が出て来るのは、イスラエルを嘲笑うためだ。彼を打ち負かす者がいれば、王はその者に多くの富と自分の娘を与え、さらにその父の家をイスラエルにおいて特権あるものにしてくれるそうだ。」(サムエル記上17:25)

これが本当に王による布告なのかそれとも単なる噂なのかについては何らの直接的証拠も存在しません。しかしそれこそが直ちにダビデの怒りの反応の引き金となったものなのです。すなわち、

「あのペリシテ人を打ち倒し、イスラエルから恥辱を取り除く者は、何をしてもらえるのですか。生ける神の戦列を嘲笑うあの無割礼のペリシテ人は、一体何者ですか。」(サムエル記上17:26)⁴

4 ダビデの冒頭の言葉はかなり後の聖書物語の中に反響を見出す。エステル記において、ユダヤ人共同体の絶滅を意図するハマンはアハシュエロス王から「王が栄誉を与えることを望む者には何をすればよいだろうか」と尋ねられる。ハマンは王が念頭に置いているのは自分と思ひ込み、何度も念入りにその同じフレーズ〔王が栄誉を与えることを望む者には〕を反復しながら、自分の身に起こって欲しいことを想像するが、ついには栄誉を与えられるべきその人物がユダヤ人モルデカイであると明らかにされるに及んで、彼の夢は砕け散ってしまう。おそらくこの種の問いが発せられるしぐさ自体が既にそれを尋ねる人物の利己心を仄めかしているのである(エステル記6:3以下)。

ダビデの言葉は、二つの要素が彼の反応に一役買ったことを暗示しています。一つは明らかに彼自身の民のみならずイスラエルの神もまたゴリアトの言葉によって侮辱されているという彼の感情です。しかしもう一つの要因は、ダビデが彼の周囲にいる人々に語りかける際に真っ先に尋ねたある褒美の約束です。この後者の面がダビデにとって重要であったことは、直後の文中で人々がダビデの質問を真剣に受け止め、「あの男を打ち倒す者はこのようにしてもらえる」と答えることで補強されています。これによってダビデの挑戦的な言葉は、反復される見込まれる褒美についての〔情報〕提示の中に囲い込まれています。語り手はここで、ダビデが権力の座に上り詰める原動力でもあったかもしれない野心について仄めかしているように思えます。やがて、サウルの次女ミカルがダビデとの愛—語り手はダビデの方も同様に彼女を愛したとは決して述べないのですが—に落ちることになります。彼女はダビデと結婚するのですが、そうすることで彼女は、おそらく知らずして、サウル王がダビデの成功について募る恐怖に対応するためのポーン〔チェスの駒〕になってしまうのです（サムエル記上18：20-29）。彼女は自分の父に従わずダビデの命を救います（サムエル記上19：11-17）。後にはサウルは彼女をライシュの子パルティと結婚させます（サムエル記上25：44）。しかしサウルの死後になってさえ、彼女はサウルの王国とダビデの王国を統合するための交渉における因子として用いられます（サムエル記下3：12-17）。彼女の体験が彼女を苦しめたことは、ダビデが自らの新しい都エルサレムへ契約の箱を運び入れた彼の最大の成功の瞬間に、彼女が彼を蔑むという彼らの最終的離反において暴露されます（サムエル記下6：16）。

たとえダビデの挑戦的な言葉が彼の前に開きつつあるより広い世界についての展望を示すものであったとしても、直後のシーンは彼を8人兄弟の末の子という幼年時代の役割と経験へと投げ戻します。ほとんど漫画的な並置で、長兄エリアブは腹立たし気に、あたかもダビデが兵士たちの戦いを観るただけに自分の義務を怠っている高慢な少年であるかのように彼をこきおろします。

「お前は何をしに、ここにやって来たのか。荒れ野にいるあの僅かな羊の群れを、誰に任せてきたのか。私はお前の傲慢さと悪い心を知っている。お前は戦いが見たくて、やって来たのであろう。」(サムエル記上17:28)

ダビデは言葉に詰まり、ゴリアトの傲慢な侮辱に対する彼の英雄的抗議から、長兄のいじめに対するある種の子どもっぽい反応へと変えられてしまいます。

「私が今、何をしたというのですか。話をしているだけではありませんか。」(サムエル記上17:29)

しかしダビデは持ち直し、ゴリアトについての心からの批判を繰り返します。そしてその言葉はまわりまわってサウル王に達します。

ダビデがサウルの前に通された時、ゴリアトに勝てる可能性は極めて低いように思われました。サウルもゴリアトもダビデを「ナアル」[נַעַר]として、通常は「若者」と訳されますが、この二人の場合は軽蔑的表現として言及しています。しかし、この言葉は、例えば明らかに大人の、重要な軍事的役割を持つヨナタンの「太刀持ち」に対しても使われています。ダビデは、自分の羊をいかにしてライオンや熊から守ったかを語ります。おそらく、彼の杖は—それを彼はゴリアトとの戦いに持っていくことになるわけですが—接近戦になると役割を果たしたに違いありません。しかし彼は、猛獣を追い払うためだけであったとしても、石投げも武器として持っていました。サウルは、ダビデの自信ないし彼の神の助けに対する疑いの余地なき信頼に納得したのか、あるいは、ゴリアトの日々の挑戦が自軍の士気を低下させる状況に対応しようとする最後の必死の試みなのか、ダビデをゴリアトと対峙させることを許可します。しかし、明らかに決闘の慣習に影響されて、サウルはゴリアトに対する何らかの防衛策を与えるべくダビデに自身の武具を身につけるよう主張します。しかし、ダビデはその重さと不便さで全く身動きがとれ

ないことに気づきます — ダビデは比較的小柄だと考えられており、サウルはこの国で最も背の高い人物として読者に紹介されていた（サムエル記上9：2）ことを忘れてはなりません！ 行うこともできないダビデの姿は、本章の物語の豊かさに思いがけないコミカルなタッチを加えています。おそらく、この武具の体験は、ゴリアトの武具の重さについての私たちの既知の情報と相まって、ダビデの戦術の本質を明らかにするのに役立ちます。直立したゴリアトは巨大な殺人マシーンですが、もし彼が地面に打ち倒されることがあれば、その重さだけで彼は自らを守ることがお手上げになります。しかし、それを実現するにはどうすればいいのでしょうか？

ダビデの第一の策は、十八番の武器として彼が選んだ石を隠すことで、ゴリアトに見えるのはダビデの杖だけとなるようにします。実際、この見かけ上の武器の選択はゴリアトを激怒させ、彼はそれをはねつけ、こう叫びました。「私は犬か。杖を持って私に向かって来るとは。」（サムエル記上17：43）おそらく、彼らの侮辱と戦いの叫びのやりとりは、ダビデがゴリアトに近づき、袋から石を取り出して石投げに取り付けるのに十分な時間を与えたと思われる。この後に続く伝統的な諸翻訳には三つの深刻な問題が含まれています。

第一に、石はゴリアトの「エル ミツホー」「彼の“額”に」[אל מצחו] 当たりました。（サムエル記上17：49）その名詞「メーツァハ」[מצח] は直訳すると「眉間」または「額」となります⁵。

ゴリアトについての文脈で翻訳に付随する問題は、ゴリアトが兜をかぶっていることが既に語られているので、ダビデはどうやって頭の保護されてい

5 それは文字通りの意味で出エジプト記 28 章 38 節において用いられ、そこではそれはアロンの額の上に巻かれた「主の聖なる者」という言葉が彫り込まれた純金の額当てを含むターバンに言及している。またエゼキエル書 9 章 4 節は、都の中で為された忌むべきことについて嘆き呻くエルサレムにいる人々の額の上に付けられた印について記している。また歴代誌下 26 章 19-20 節はウジヤ王が神殿に押し入ろうとした時、彼の額の上に現れたところのツァーラアトについて語っている。それはまた「心の頑なな」と並行法で（エゼキエル 3：7-9）、あるいは、青銅のような頑なさ（イザヤ 48：4）や「遊女の額のような恥知らず」（エレミヤ 3：3）においては、「頑固さ」の意味で隠喩的に用いられる。

る部分に石を通り抜けさせることができたのか、ということです。第二に、恐らくもっと深刻なのは、次の文に、その石は「彼のメーツァハの中に沈んだ」と書いてあることです。もし、それが額のことであれば、医学的に興味深い推測を導きはしますけれども、描写としては殆ど意味を成しません。おそらくゴリアトの巨大さは、彼が「先端巨大症」と呼ばれるホルモンの病気を患っていることを意味し、骨が過度に大きくなるが、多分柔らかくもなるため、石が「めりこむ」ことができたのでしょう。しかし、たとえ私たちがこの提案を正当化できたとしても、第三の要素、つまり、なぜ前頭部への一撃がゴリアトを、仰向けではなく、「うつ伏せに」倒させたのかを説明することはできないでしょう。

私が推測するに、このようなことが起こり得ることを説明するために奇跡を引き合いに出すことは可能でしょうが、幸いにもその必要はありません。もし私たちがゴリアトの武具の叙述まで戻るなら、彼の下肢を保護する武具、つまり脛当ての叙述に〔サムエル記上17:6〕において、ヘブライ語聖書でここだけに登場する同一の単語に出くわすこととなります。ゴリアトが膝を曲げて歩けるようにするために、その脛当ては彼の膝のすぐ上の高さまであったでしょう（イギリスのクリケットを観たことがある人は、同じ保護機能を果たす「クリケット・パッド」をご存じでしょう）。ここで使われているヘブライ語の単語は、その文法的な連語形を成すための一文字〔ן〕を加えた、「額」を表すあの単語と同じ文字〔מצח〕を持っています。すなわち、ミツハト・ネホーシェト「青銅の脛当て」〔מצחת נחשת〕です。この関連性は、何年も前にアリエラ・ディームが『*Vetus Testamentum*』誌に発表した論文で指摘されています⁶。この読み方では、石はゴリアトの一方の脛当てのすぐ上に当たり、〔長靴に石が入るように〕その後ろに「沈みこんで」、ついに彼を躓かせ、うつ伏せに倒れさせるに至ったのだと考えられます。一旦倒してしまえば、ダビデにはゴリアトの剣を奪い、それでゴリアトを殺す余裕がありました。

6 Ariella Deem, "'... And the Stone Sank into His Forehead' A Note on 1 Samuel 17:49,' *Vetus Testamentum*, Vol 28.3 (1978), pp.349-351.

このこと全ては、ダビデの戦略的思考への賛辞ですが、「ゴリアトに不公平？」という講演題を正当化するには十分ではないかもしれません。しかし、注目される必要のある、一般的な戦争の遂行に関係するもう一つの次元が存在します。ヘブライ大学の考古学教授で、1948年のイスラエル独立戦争時にはイスラエル軍の参謀長を務めたイーガル・ヤディンは、その著書『聖書の地における兵法』において、軍事的な問題を分析しています⁷。

お互いに対立する国家には相互影響が存在する。異なる武器、要塞、戦術、軍隊組織が互いの上に及ぼす、必然的かつ一貫した同様の相互影響がある…

軍事開発の研究の大部分は、戦争行為における各要素を相手方に反応させる絶え間ない過程の研究である。……武器の発達、戦術、軍の構造、要塞のシステムの発達を背景にして研究されなければならない……しかし、異なる民族の間で軍事的発展の速度に影響を与えてきた人間的な特徴、すなわち惰性や保守主義についても考慮が払われねばならない…

ヤディンは矢をよけるための鎖帷子の発明を例に挙げています。しかし、その結果、より強力な弓が開発され、そして今度はさらにより強力な武具が必要になったのです。ダビデとゴリアトのケースでは、惰性や保守主義の問題の例を見ることができます。ゴリアトは、武器と防御力が互角である代表戦士同士が戦場でとことん戦い抜くという、特有の決闘の伝統にすっかり依存していました。ここでは、その代わりにゴリアトの前に立ちはだかっただのは、敏捷に動き回り、秘密兵器を持った対戦相手でした。石投げはお気に入りの、十分な実績に裏打ちされた軍事用兵器でした。それは羽にかかる抵抗によって妨げられることもなく、遙かに速く、遠くまで飛ばすことができるという点で、矢を凌ぐ利点がありました。正確さについては『士師記』に、ベニヤミン族は左利きの兵士700人を編成し、その全員が、髪の毛一筋さえも

7 Yigal Yadin, *The Art of Warfare in Biblical Lands in the Light of Archaeological Discovery* (Weidenfeld and Nicolson, London, 1963), p.2.

外すことのない投石の名手であったと記録されています（士師記20：16）。多少の誇張はあるにせよ、熟練した者はかなり正確に投げることができたのでしょう。このようにして投げられた石の威力については、実験によって、石投げの石の速度と力は、拳銃の弾丸のそれに等しいことが証明されています。ダビデは羊飼いで、確かにその技術を磨いていたのでしょう。ゴリアトの武具の持つ弱点を見抜いていたとすれば、あわれなゴリアトに勝ち目はなかったのです⁸。

ダビデがゴリアトに勝利した話がこの章の中心ですが、ダビデに関する物語はそこで終わりではありません。この章の最後の2節は、すでに私たちが検証してきた二つの先行するテキストの再評価に私たちを導くかもしれないところの問題を提起しています。

サウルはダビデがあのかペリシテ人に立ち向かうのを見て、將軍アブネルに言った。「アブネル、あの若者は誰の息子か。」アブネルは答えた。「王様、誓って申し上げますが、私は存じません。」すると王は言った。「あの少年が誰の息子なのか調べてくれ。」ダビデがあのかペリシテ人を打ち倒して帰って来ると、アブネルはダビデを連れて、サウルの前に出た。あのかペリシテ人の首はダビデの手にあった。サウルは言った。「若者よ、お前は誰の息子か。」ダビデは答えた。「あなたの僕、ベツレヘム人のエッサイの息子です。」（サムエル記上17：55-58）

8 サムエル記下 21 章 19 節には、ペリシテの 4 人の「巨人」とダビデの家臣たちの戦記中に、ゴリアト殺しに関するもう一つの矛盾する記事が存在する。ここではゴリアト殺しの手柄はベニヤミン出身のヤアレ・オルギムの子エルハナンに帰されている。歴代誌上 20 章 5 節におけるその並行記事は、エルハナンが殺したのは「ゴリアトの弟ラフミ」とすることによって、ダビデ物語とこのヴァージョンを調和しようとしている。おそらく、この記録を〔矛盾〕にもかかわらず保存する一方で、出来事それ自体はダビデの初期の歴史についてのこの活き活きとした伝説的物語に移された。

より広い文脈

17章で初めてダビデが登場した時、彼は次のように紹介されています。

さて、ダビデはユダのベツレヘム出身のエフラタ人で、名をエッサイと言う人の息子であった。エッサイには八人の息子がいた。サウルの時代に、エッサイは人々の間で長老であった。エッサイの上の三人の息子たちは、サウルに従って戦いに出ていた。戦いに出た三人の息子の名は、長男エリアブ、次男アビナダブ、三男シャンマであった。ダビデは末の子であり、サウルに従ったのは上の三人であった。ダビデはベツレヘムの父の羊を飼うために、サウルのもとを行ったり来たりしていた。(サムエル記上17：12-15)

先述したように、この詳細な描写は私たちが前章でダビデについて学んでしまっている情報を繰り返しており、それはこれらの章の編集についての問題を提起します。

サムエル記では、祭司、預言者、政治的指導者として行動していたサムエルによってイスラエル人がどのように導かれていたかが分かります。しかし、彼が老齢になるにつれて、民は他の周辺諸国との戦争で自分たちを率いる王の必要性を感じていました。サムエルは反対しましたが神はこれに同意し、サムエルに自分を訪ねてくるベニヤミン族の若者に王として油を注ぐように命じました。その翌日、サムエルは自分の許に来た背の高いハンサムな若者に会い、すぐに彼が王になるべき者だと想定し、神も許可しました。しかし、サムエルは指導者の交代を不服としていたこともあり、サウルと確執を生じるようになり、事実上さまざまな形でサウルを弱体化させるようになりしました。事態は頂点に達し、彼らの最終的決裂に至り、神はサムエルにサウルの後継者に油を注ぐように命じます。16章では、ゴリアトのエピソードの直前に、サムエルはベツレヘムのエッサイの家を訪れ、彼の息子の一人にサウル

の後継者として油を注ぐべく秘密裏に旅します。エッサイとその上の3人の息子たちの名前が紹介されます。サムエルは長男のエリアブに、サウルを選んだのと同種の身体的見栄えの良さを見出します。そこで神はサムエルが口を開く前にすぐに介入し、神が求める資質はこうした外見に基づくものではないことを預言者に思い出させなければなりませんでした。実際サムエルは、神の言葉を待つことよりも自らの個人的な見解に頼ったことを非難されるのです。

容姿や背丈に捕らわれてはならない。私は彼を退ける。私は人が見るようには見ないからだ。人は目に映るところを見るが、私は心を見る。
(サムエル記上16:7)

エッサイの他の息子たちが〔神の〕目に適わなかったので、ついにダビデが羊の番をしていたところから連れて来られ、サムエルはためらいますが、神は彼に言います。

「立って彼に油を注ぎなさい。彼がその人である。」(サムエル記上16:12)

おそらく、ダビデの油注ぎの秘密は、彼が表舞台に現れるべき時が来るまで、家族の間で守られていたのでしょう。しかし、この二つの章の連続性という点では、これがダビデに対するエリアブの怒りの爆発の上に光を投じることになります。ゴリアトへの劇的な攻撃は、ダビデを衆目に晒すことになり、それは彼とその家族の危険につながることは明らかでした。こういうわけで、自分のしゃべったことの中には家族の秘密を漏らすいかなるものもなかったというダビデの主張に至るのです。

16章後半では、ダビデとエッサイの家族関係について再び言及されますが、その文脈は全く異なります。そこでの本文はサウルと、時に彼を圧倒するその精神的障害を直接扱っています。聖書的観点によれば、神からの「悪霊」

がサウルをさいなむようになったとあります。彼の家来たちは、琴で奏でられる音楽的癒しの効果が助けになるかもしれないと勧め、またある者は、力強く意義深い言葉で表現しつつ余人を以て代え難しとダビデを薦めます。

サウルは家来たちに言った。「琴の名手を見つけ出し、ここに連れて来てくれ。」従者の一人が答えた。「申し上げます。私はベツレヘム人エッサイの息子に会ったことがあります。彼は琴を弾くのが巧みで、力ある勇士でもあり、戦士でもあります。しかも、言動に慎重で容姿に優れ、主が彼と共におられます。」そこでサウルはエッサイのもとに使者を遣わして言った。「あなたの息子で、羊の番をするダビデを私のもとによこしなさい。」(サムエル記上16：17-19)

ダビデの属性のリストは、全く別の伝記に属しているように思われます。ロバート・アルターは、ここでダビデに帰されている軍事的資質は、次章で彼が発揮する軍事的能力を説明するための編集的付加であった可能性があるとし唆しています⁹。しかしながら、その文脈においては、音楽の腕前とは別に、ここでリストに挙げられている肝要な資質は、彼が「言動に慎重」で、サウルの病気が広範に知られないよう秘密を守る頼りになる人物という点にあると考えられます。その上さらに、軍事的能力についてのリストアップも同様に、ダビデが口外禁止の命令に服する人物であることをサウルに重ねて保証するという同じ理由で追加されたのでしょう。しかし、もしダビデの油注ぎが既に人々に知られていたとすれば、より悪意のある説明ですが、潜在的な脅威に対処する最善の方法は、その者を近くに置いて注意深く監視することです。

9 訳注：「言動に慎重で」は講演者の英訳による。協会共同訳では「聡明で」となっている。

10 Cf. Robert Alter, *Ancient Israel: The Former Prophets: A Translation with Commentary* (W. W. Norton and Company Inc. New York, London 2013), pp.332-333.

16章の二つの物語に何らかの連続性があるとすれば、サウルからエッサイへのダビデを自分の許によこすようにとの促しは、恐怖の瞬間だったに違いありません。確かにそれは、王に対する反逆に他ならないとみなされる秘密の油注ぎが露見したことを意味します。エッサイには、王に楽を奏するためにダビデを送り出す以外に選択肢はありません。その結果は拍子抜けするものでした。

ダビデはサウルのもとに来て、彼に仕えた。サウルはダビデが非常に気に入る、自分の武器を持つ従者とした。サウルはエッサイに人を遣わして言った。「ダビデを私に仕えさせてほしい。彼は私の目に適った。」神の霊がサウルを襲う度に、ダビデは琴を手にして爪弾いた。するとサウルは休まり、良くなって、悪い霊は彼を離れた。(サムエル記上16:21-23)

ところが、この章の全ての背景にもかかわらず、ダビデがサウルの前に現れてゴリアトを退治すると申し出た時、サウルは彼のことを知らないように見えます。サウルの前で楽を奏するためにダビデを招いたことがあるにもかかわらず、17章の終わりではサウルもアブネルもダビデが誰であることを知らないようであることが実際に強調されています。

ロバート・アルターは、ダビデとサウルはどのように最初に出会ったのかについての二つの物語を — 例えば、サウルは病気のために健忘症に侵され、アブネルは単に彼に調子を合わせただけ、と想定することによって — 調和させようとする試みは説得力がないと指摘しています¹¹。アルターは、16章と17章がダビデの始まりに関する二つの異なる伝承を表しているという広く行き渡っている学術的見解に説得力があると示唆しています。彼は、それらがダビデに関して与える有益な二重の視点の故に、編集者が矛盾にもかかわらず両方のヴァージョンを保存したのだと結論付けています。仮に事態がその通りであったにせよ、にもかかわらずその二つのヴァージョンを結びつけよ

11 *Ibid.*, p.343.

うとする試みの証拠があるかもしれません。例えば、先述してきたように、エリアブのダビデに対する怒りは、ダビデが預言者サムエルによって油を注がれたという16章の秘密をダビデが暴露して、一族に害をもたらしかもしれないという恐れを反映しているのかもしれません。しかし、エリアブが怒っているのは、長子でありながら末の弟に先を越されたからかもしれません。また、ダビデの兄たちはサウルの陣営にいたが、「ダビデはベツレヘムの父の羊を飼うために、**サウル**のもとを行ったり来たりしていた」（サムエル記上17：15）ことを説明する一文があります。これは、戦場の兄たちに食糧を運ぶ以外に、ダビデがサウルのために楽を奏するために時々呼び出されていたことと関係があるのかもしれません。

結 論

大衆を惹きつける観点では、際立っているのはダビデがゴリアトを倒した事実そのものです。しかし、それはまた、そのキャリアを通じてダビデに大いに役立ったであろう戦術的、戦略的、軍事的、政治的スキルを言外に仄めかすものでもあります。すなわち、社会から見放された者たちの一団を率いてサウルから逃亡する初期の数年間においても〔サムエル記上22章〕、ペリシテの地に亡命し、そこで彼らに逆らって秘密の軍事作戦を行っていた時期においても〔同27章〕、サウルの死後その二つの王国を統合し維持している間にも〔サムエル記下1章以下〕、国家存亡を懸けた戦闘や小さな帝国を築くまでの征服戦争を戦っている時にも〔同5、8章〕。恐らく何にもまして彼は、息子アブシャロムの反乱によってエルサレムの放棄を余儀なくされた後の巧みな回復によって機略に富むことを示しました〔同15-18章〕。それがサムエル記に描かれた外面的・伝説的なダビデです。しかし同書はまた私たちに、彼を突き動かす野心、家庭生活の悲劇、王としての公的要請と、一人の人としての私的必要との間に絶えずつきまとう緊張といった、内なる人も示してくれます。ゴリアトの侮辱に直面して自らの神の名誉を守ったその同じ若者が、しかし生涯を通じてその同じ神と格闘することになるのです。

この章では、すでに十分に〔スキルの〕形成された若いダビデが、世界の舞台へと第一歩を踏み出します。見かけ上は有利だったにもかかわらず、ゴリアトが彼に殆ど歯が立たなかったのは不思議なことではありません。アリエラ・ディームが彼女の論文で結論付けているように、「アキレス腱」という伝説的なイメージに、私たちは「ゴリアトの膝」を加えるべきでしょう！¹²

12 Deem, p.351.